

《海外研究室事情 (36)》

The Department of Physics and Astronomy, The University of Oklahoma

オクラホマ大学 物理・天文学部

<http://www.nhn.ou.edu/>

雷雨ニモ負ケズ、竜巻ニモマケズ
冷房ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナ体ヲ持ツ、サウイフ人に私はなれない…

オクラホマで最も強く感じたこと、それはやはり気候および気象の厳しさでしょう。こちらに来る前に宇宙科学研究所で同室だったアメリカ人から “The climate is extreme.” と聞いてはいましたが、海洋性気候しか知らない私の想像力の及ぶところではありませんでした。華氏 100 度 (摂氏 38 度) を超える日が数十日あった長い長い去年の夏。屋内は 20℃ 前半の寒い寒い世界。緯度は約 35 度で東京とほぼ同じなのに、午後に向向を 5 分歩くと目を痛めるほど強い太陽光線。快晴の空が俄かに曇り、あっという間にバケツどころではない浴槽を引っくり返したような土砂降り。天候の話題を挙げれば切りがありません。それでも、竜巻に襲われるという怖い目には未だ遭遇していないので、まだまだ修行が足りないのかもしれません…。

さて、そんなオクラホマ州は、アメリカ合衆国のほぼ真ん中にあるカンザス州の南、テキサス州の北に位置しています。名前だけは聞いたことがあるという方は州都オクラホマシティーで 7 年前に起きた連邦ビル爆破事件あるいは今年初夏の橋梁落下事故がらみで御存知になったのではないのでしょうか。メインキャンパスは、州都より 40km 南にある Norman という小さな市にあります。夜に歩いてみてもまず大丈夫なくらい平和なところですよ。オクラホマは、歴史的には、東部に住んでいたインディアンが強い



ある夏の夕方の光景。論文投稿記念にボス(一番奥)がグループメンバーにビールをご馳走してくれました。ちなみに、筆者=撮影者につき私は写ってません。

制移住させられた土地であり、英語らしからぬオクラホマという地名はインディアン言葉で「赤い人々」の意味なんだそうです。やがてオクラホマは白人に開放されるんですが、その時には手付かずの土地は早い者勝ちで自分のものに出来たんだそうです。

オクラホマ大学 (通称 OU) は、3 万人近い在籍者数をかかえる、とても大きな州立大学です。その中にあって、物理・天文学部は、教授と助教授数が 29 人 (他に名誉教授 2 名) ですから、それほど大勢力ではないのかなというのが私の印象です。知人の某日本人学部生の発言によれば、理系に強い大学なのだそうですが。

天文分野に限ると、教授と助教授を合わせて 7 人です。アメリカの大学では普通かやや小さめだそうです。特筆すべきは、教授のうち 3 人が超新星がらみの研究をしていること。超新星の分野では全米でも強い学部だと言ってよいでしょう。学部内で共同研究する事を奨励しており、それが本学部の特色の一つなんだそうです。

さて、我々のグループの研究対象はというと、

活動銀河核です。我がボス Karen M. Leighly が2000年の夏に着任して始めたばかりなので、今のところは私のほかには学生が数人といった小所帯です。ボスは、X線観測から研究を始めた人ですが、今はUVや可視光観測にも通じており、X線観測で育った私は学ぶところも多いです。当然、英語の面で学ぶところは果てしなくて、収録原稿ではOKだった文章が本論文やプロポーザルでは真っ赤に訂正されて返ってきた時には、母国語とする者の英語の質の違いを痛感したものです。ボスのおかげでX線衛星XMMの観測提案が通ったんですし、ここで研究できることを本当に感謝しています。

セミナーとしては、基本的にグループミーティングが週に一度、そして、学部のコロキウムが学期中は週に一度あります。その他にも、例えば、超新星グループの定例セミナーなどがあり、参加することももちろん可能です。あと、Tea timeが毎日15時半からありますが、イギリスとは違って皆が常に参加というのではなく、好きな人が気の向いた時に参加するという程度です。

アメリカの大学で日本との大きな違いを感じる点は、学生に対する認識というか金銭環境の違いです。日本でも耳にはしてはいましたが、アメリカの院生（少なくとも理系では）が生活していくに足る給料を貰うのは本当に普通の事でした。某大学では院生に給料を払うことが出来ないなら院生をとってはいけないという決まりすらあるとまで聞きました。学部生だって、REU (Research experiences for Undergraduates) というプログラムがあり、優秀な学生は給料を得る機会が与えられています。ちなみにREUは国立科学基金(?)に応募して選考に通った学部だけがもつプログラムだそうで、それほど普通にあるプログラムではないそうです。学部生および院生に対する報酬の詳細はwebに載っています。私は自分の視野の狭さから学生の間に海外で生活することを一度も考えもしませんでした。我こそはと思う方はアメリカ進出も考えてみては如何でしょうか？ 英語能力を含めたアメリカへの同化度は、

より若いうちに渡米する方がより高くなるようです。

他に、こちらに来て強く感じたことは、大学内外を問わず、機会均等化への意識が高いことです。例えば、着任した時にセクハラ講習（webでクイズ形式）を受けなければいけなかったり、テレビにはクローズド・キャプションという音声を字幕化して表示する機能が備わっていたり（本来は聴覚の不自由な人向け。私は英語訓練に活用中）、町中や観光地で車椅子の方が自然に行動していたりします。女性としてアメリカの社会を羨ましく思う点は、働きつつ子育てすることが自然なこととして受け入れられていること。ある女性教授は3人の子持ちです。一年前に出産したばかりの学部内研究者カップルは大学に子供を連れてきて、交代で面倒を見ている。そして周りは、その子が学部セミナー中に少々ぐずっても特に気にも留めないくらい自然に赤ちゃんが大学にいることを受け入れています。

アメリカで暮らすことは、出発前は正直不安でしたが、始めてみれば特に大きな問題はありませんでした。ニュースで犯罪や訴訟沙汰を見ているとアメリカ社会に嫌気を感じることもありますが、個人のレベルではとても親切で親しみやすく気持ちの良い人達です。中西部の人は特にそうだと聞きました。大都会は除いて、生活費も安いし、アパートは広いし、食生活と浴槽の深さを除けば、日本より快適かもしれません。個人的には、終の住処とまでは思えませんが、数年間暮らしてみる価値は大いにあると思っています。

最後に、「オクラホマミキサー」というフォークダンスの代表曲をご存知の方は多いと思います。しかし、こちらでは未だダンスを目にすることもなく、話題にしてみても知っている人に出会えません。あの曲の由来をご存知の方がおられたら、ぜひ教えていただきたいものです。

松本千穂

(2001年5月よりオクラホマ大学ポスドク)